

Monthly Report 月間報告 2003年1月～6月

2003年1月

女性が大きなお皿を下唇に挟んでおしゃれをするムルシ族。ヤギの皮を衣装とするハマール族(添付写真)。ミニスカートのような小さい布を腰に巻いて、逞しい上半身に白いペイントで化粧をし、鳥の羽を頭につけるカロ族の男性。その他、バナナ族、アリ族など10にもおよぶ多様な民族が小さな地域に集中して住んでいます。このエチオピア南部のオモ溪谷低地帯は、世界にも稀に見るほどの多様な牧畜の民族がいることで知られ、世界中からも観光客が押しかける未開の世界です。

今回は、京都大学アジア・アフリカ地域研究科の学生についてエチオピアは南部を訪問。彼らはエチオピアにおいて多くの人類学的調査・研究を長年続けており、毎年学生がエチオピアの農村奥地に入ってフィールド調査などを行っています。今回はエチオピア南部のマゴ国立公園内、および周辺地域の民族を社会、経済的な調査を実施している学生の新たなフィールド訪問調査にテント、寝袋をもって同行しました。民族間の戦いが継続している可能性もあったので、それぞれの民族から抜擢された国立公園の監視員が銃をもって警戒。しかし、集落ではキャンプを張る許可なども問題なく行われ、二つの村からは最上のヤギまで頂きました。

牧畜民の質素な生活。プラスチック製品などがまだ普及していない地域にあっては、ひょうたんや土作りの壺が主な生活食器になるので、それに合わせた食生活になります。ヤギの肉にしても、食用油で炒めたりせずにそのまま木の枝に差し、遠火でじっくり焼き付けます。調理に余計な油分を加えないだけに、時間をかけたヤギの焼肉は絶品。砂糖も塩もないので、メイズやソルガム等の穀物も茹でたものをつぶし、味をつけずにそのまま食べます。一方、家畜に囲まれて生活しているので、家畜の乳、それを発酵させたヨーグルトなどが豊富。適度なたんぱく質やカルシウムを摂取することが出来、適度な運動(といっても10～20キロを普通に歩く)と併せて、彼らの健康的な生活スタイルから我々が学ぶものがたくさんあります。夕方、家畜達を住居の前に連れて帰ってくる際に、放牧の世話をした帰ってきた子供達が、ヤギの乳に直接口をつけて栄養価の高い乳をごくごく飲んでいました。

牧畜生活を営む彼らは、家畜と共に水場を求めて炎天下何十キロと歩くのが普通。ジムやエステがなくても、筋肉隆々の肉体を作り上げられるのです。肥満でお腹が出ている人も皆無。少数であるがゆえに自分たちの民族存続をかけて、民族間の紛争が絶えず、逞しい体つきの男性のほとんどは銃をもって歩いています。自身の子供よりも大切にされている家畜達。そ

の次に大事なのが武器なのだ。

公園内には今でも象、バッファローなど大型野生動物が生息するものの、牧畜民による狩猟などでここ数年間野生動物が減少の一途をたどっています。しかし、自然、野生動物保護を目的とした国立公園という括り方は、以前から地域に住み、野生動物生態、気候すべてを知り尽くした彼らにとって何も意味を成しません。砂地に残った小さな足跡を見るだけで、誰が通ったかをも判断してしまうほど。狩猟の技術、その成果で男性のステータスなどが計られる社会だからこそ、一方的に彼らの狩猟を中心としたライフスタイルに規制が設けられても、公園や政府が期待するような保護戦略には繋がらないのです。

村に住みこみ、人々の食事も共にして調査を進めてきた学生は言います。「国立公園保護プロジェクトを立ち上げ、住民の意識改善を目的としたセミナー実施、監視体制の強化を進めたとしても問題は続くだけです。牧畜民族の生活や価値観にこちらから近づき、彼らを理解していく時に、本当の意味での解決策が見つかると思います。もちろん単年度予算などで括るようなやり方では難しいし、すぐにドナーが喜びそうな結果報告も期待できませんが。」

考えてみると、私達が外部者の視点でその土地の問題を解決しようと始める時に、問題の根本原因から遠ざかります。そもそも問題解決をしようとする「動機」はそこにいる人々に元々備わっているところから来るものであり、外からその「動機」を植え付けるものでもありません。密猟を防止する為に監視員を増員する。野生動物の絶滅がもたらす環境への影響を人々に教える。柵を作る。人々にどうしたらいいのかを尋ねる前に、こちらから解決策を提示してしまう。提示されてばかりでは、自分たちから自分たちが良いと思うことを提示することを止めてしまう。これでは本当の意味での会話すら成り立ちません。

牧畜民はまさに人との関係を何よりも大事にする民族として知られています。初対面後、しっかり関係が築かれた相手に対しては、次に会った時に最初とは微妙に異なった表現で挨拶をします。その違いが出てくるまでは、絶対に相手を信用していないことが分かるのです。

野生動物達が自由に生息する広大で、肥沃な大地。一世帯一千頭の家畜を超えるところもある豊かな人々。いま、この同じ国にあって、外国から穀物を運んで配布しなければ明日も生きていけない人々がいるとは到底信じられません。そして、ただ私達が適切だと考える問題への答え、手段を提示するだけでは、このエチオピアに存在する貧困、飢餓は決して解決出来ないのではないかと思わされます。井戸を掘る。木を植える。その前にしっかりとお互いの名前呼び合い、関係が築かれていくこと。それが、プロジェクトの準備のためだけでなく、プロジェクトの重要な活動内容になっていくことを願わずにいられません。

2003年2月

アフリカにあっては、肌の黒くない外国人が通りを歩くだけでも目立ってしまいます。じろじろ見つめられては、冷やかし半分で声はかけられる。日本人なのに中国人と呼ばれる。もちろん寄ってくる物乞い。そして、物乞いが本業でもないのにお金目当てで付いて来る子供達。朝から十分な草を食べられなかったのか、死にそうな泣き声でうろうろする羊達。目やにが目の半分ぐらいまで覆っているのにだれも取ってくれずに、不満そうな口バ。糞尿垂れ流しで狭い道路をふさぐ牛。車の排気ガス、埃。乱暴な運転のタクシー。

午後や早朝の時間を使ってのジョギングの間、出会うものを数え始めたら切りがありません。そして、すべてに気を使っていたら、それだけで疲れてしまいます。私の住む首都の住宅街には、外国人は一人だけ。それだけに、ちょっと外にでるだけでも目立ち、恥ずかしさからやはり視線はいつしか下を向いていたのです。表情も晴れ晴れしていない。いっそのことジョギングなどやめようかと。メタロビなどの田舎であればのびのびなののですが。

しかし、微妙に体の角度を変え、胸を張って堂々と歩き、ちょっとだけでも笑顔を見せると、回りの反応は激変。以前よりも挨拶を交わす人が自然と増えてくるのです。人々の視線、罵声などで、いつしか自分という看板を下ろしてしまい、「訳のわからない外国人」を勝手に演じてしまっていた自分に気づいたのです。そう、私が言葉を発しなくても、人々は私の表情や目線という「看板」を通じて反応するのです。自分の内面は、必ず表情、体全体を通じて知らず知らずの間に現れてしまうのです。

自分という看板をどう掲げているかが、自分を取り巻く人間関係を決定付けるとも言えます。いつも他人との比較、競争を気にした自分を看板とするのか。単なるその時その時の感情、回りの状況次第でころころ変わるものなのか。いっそのこと、肌を真っ黒に塗りたくったら、誰も注目しないだろうし、買い物でも値段を吊り上げられることも無かろう、とふと思うこともあります。でも、回りに同化すること、無難に過ごすことが、自分にとっては何の価値をも生み出さないのです。返って本当の自分が薄まっていくことで、自身の価値をも失ってしまいます。

汚く寂れた看板のお店には、足を運ぼうとは思わないのと同様、自分自身を表す看板によって自分を取り巻く環境はいくらでも変わります。本当の自分がしっかり表されるような看板をいっつも掲げて歩みたいと思わされるこの頃です。

2003年3月

「ある朝、木の枝にひとつの繭を見つけました。よくみると、すっかり成長した蛹が繭の殻を突き破って今にもその姿を表そうかというところ。私はしばらく待つ様子を見ていましたが、なかなか外に出てきません。もう待ちきれません。蛹に近づき、一刻も早く外に出られるよう、温かい息を吹きかけ元気付けると、見る見るうちに力を得て出てきます。でも、それは予定よりも早く出てきてしまった蝶の出来損ない。まだ、その羽はしわくちゃに閉じられたまま。哀れな蝶は体をゆすぶりながら、なんとか羽を広げようとしますが、それも適いません。私も息を吹きかけ助けます。でも、もう手遅れです。それは、蛹が孵化、成長する過程はとて時間のかかるものであり、羽はゆっくりと太陽の光に照らされる事でようやく広げられるものだから。私の息で蛹が早く孵化できたものの、その未熟な蝶は見るも耐えがたい姿。早過ぎたのです。やがて、蝶は私の掌の中で死んでいきました。」

この話を聞くと、私が小さい頃にザリガニ、カマキリ、トカゲさまざまな生き物を捕まえ、人間の都合でダンボール箱やビンなどでの飼育を試みては、結局殺してしまっていた時のことを思い出します。デリケートな自然界の法則を理解もせず、生き物の命を台無しにしていた子供の無知が成せる業です。また、私自身が小さな生き物達の姿から、自分がして良いこと、してはいけない事の分別がなく、そこから学ぶ姿勢も皆無だったことは言うまでもありません。

国際協力の世界では、「発展途上国:持たざる物 VS 先進国:持てる物」という構図から、持たざる国へ資源を投入、人材の教育、技術訓練をすれば必ず持てる物の経済レベルへ到達する、という古い概念に未だに捕らわれている団体が後を絶ちません。そうではないことは、この数十年におよぶ大型援助が結果をもたらしていないことを見れば歴然としています。しかし、私自身の反省も含めて、人々の潜在能力に焦点を当てることを目標にしても、尚経験から学ばない、人々の成長を待てない。彼らから聞き、共に学ぼうとする姿勢に欠けていること等にふと気づかされます。蛹の成長の例と同様、相手と自分との間に大きな違いが見えているのに、その相手から「自分は何者か？」を問わず、自分の立場を正しく捉えないことから起きる過ちを未だに繰り返しているのです。

キャパシティービルディング(Capacity Building)。日本語では「能力向上」「能力構築」と訳され、人々・民間団体自身の能力を高めるという意が含まれます。世界銀行の貧困削減政策キーワードともなり、国際協力による様々な取り組みが、地域の人々によって持続されていくためには、その人々の能力を向上、発展させなければいけないという意識から、エチオピアでも頻繁に聞かれる用語です。しかし、現実には技術・知識のある国際団体が、貧しい、弱く、何も知らない地域団体・人々へトップダウンでトレーニングする、といった歪んだイメージが蔓延し

ています。

これは、NGO による開発プロジェクトの実施スタイルが、貧しい農村の為に「やってあげる」という「開発屋さん」感覚が多く、NGO と村人と共に学ぶ「関係作り」に焦点が当てられてきていないという背景、また長年培われてきた NGO の組織文化にも起因するものと思います。また、「お金の切れ目が縁の切れ目」とはよく言ったものですが、多くの農村開発プロジェクトが、お金を持つ NGO 側の勝手な都合で活動が組み込まれていることも問題です。終了した活動を続けるのは当の農民達なのに、長い間依存心を植え付けておきながら、いざ最後に彼らの自立度を測ると無残な姿。そして、「人々の能力開発が大事だ！」と叫んでは、形式的にトレーニングをして「やりっ放し」で終わるという始末。

しかし、本来人間の Capacity「能力」の向上は、村人と同時に、それに関わる私達自身が共に学んでいくプロセスです。「学ぶと言うことは＜自分が実践する＞という心があって、初めて機能するもの」とある本で教えられました。それは、何らかの活動を通して人々の訓練をするにしても、まず教える自分にもまだまだ教えられる、学ばされるものがあるという実体を伴った姿勢があってこそ、その訓練の意味を成すのです。

3 月初旬、JIFH(日本国際飢餓対策機構)代表を迎えて、これから 5 年、10 年の長期計画と一緒に立てる会議が開催されました。そこで私が問題提起したのが、このキャパシティービルディングの考え方と取り組みです。エチオピアの国レベル、そして草の根レベルでも、しっかり「ひとづくり」が実践されていく為には、私達の組織運営スタイル、構造、スタッフの姿勢などを振り返る必要があります。そこで、過去・現在のプロジェクト地も含めて、コミュニティー・人々と共に「学び続ける」ことを基本とし、新しいモデルとなり得るプロジェクトを更に発展させ、なによりもスタッフ・組織の成長、信頼構築を促進していく部署の設立が決まりました。「持続可能な農村開発を！」と言う前に、果たして自分達は持続可能な能力を持つ組織なのか、失敗からもしっかり学ぶことのできる文化があるのか。そういった本質的なことをチャレンジしていかなければなりません。これは利益を追求する一般企業でも同じように求められている資質であり、そういった他分野との関連性にも目を向けていきたいと思います。

エチオピア駐在2年が経ち、ようやく自分がしっかり関わっていけるものが見えてきました。この「学び続ける」組織を目指す時、それは日本の支援者との関係も含まれていきます。「エチオピアに何も無いから援助する」のではなく、お互いのゆっくりとした成長を忍耐強く待ちつつ、「そこにある貧しい人々から学ぶものがあるから」する協力関係を築いていきたいと思いません。

2003年4月

1年ぶりに引越しをしました。都市の中心から離れた住宅街で外国人もいないために物件も安価で住む土地だったものの、最近では都心へ直通の大型バスが乗り入れ始めたために、土地の値段も上昇、人口増加、そして家が面する通りの騒音が日毎に増すばかり。仕方なく、同じ住宅街でありながら、すこし静かなところへ引越しとなりました。

もちろん一人暮らしなので、荷物の移動に大型トラックなどは必要ありませんが、この2年間の滞在で溜まったものも含めての大移動はかなりの仕事です。私は同僚達に手伝ってもらい、滞りなく済みましたが、ふと思い出したのが日本にある引越し業者。依頼主はまったく働かないで、業者が一気に引越し作業を承ると言うもの。これは、エチオピアではまず考えられない業界と思われます。ちょっと大きめの家具を移動させている車を通りで見かけては、道でブラブラしている少年達が荷降ろしの手伝いをするからとしつこく寄ってたかり、手伝った挙句に高額な賃金を要求したり、荷降ろしの最中に家のものを盗んだりということがよくあるからです。信頼のおけるトラック業者であっても、赤の他人がやってきて、自分の家の家具を整理し、新居へ移動させてはすべてもとあったままの状態にまでするビジネスは想像できません。まさに「信頼」そのものがビジネスになっている例といえます。

市場での値段交渉もその「信頼」に関わる大きなビジネスの場。現地の人から、前もってその正規な値段を聞いておけば問題ないのですが、その情報がない場合には直接交渉しなければなりません。こっちも負けていられないので、吹っかけられた値段のせめて8割以上低い値段を想定します(これは都市部の市場のみ)。でも、場合によってはそれがあまりにも売り手にとって不利としかならない時もあるので難しいところです。押しに押しして値引きさせても、相手そして自分にとってもなんだか後味悪い買い物になってしまえば、「また、ここにきて買い物しよう」という気持ちも湧きません。当然売り手も「こいつには二度とものを売るものか！」と反発するでしょう。これは、両者が相手に対しての「信頼」が全くないことから起きると思います。Win-Winどころでなく、Lose-Lose。建設的ではありません。それでもこの商売スタイル、特に外国人への対応は最初から信頼などあったものではありません。きっと、騙されたことを知らずに良い買い物をしたと思いこんでいる外国人もいることを考えれば、結果的にWin-Winになっているケースもあるのでしょう。

しかし、「騙されるものか！」という気持ちがどこことなく自分の表情、言葉にも自然と表れ、それが相手にも伝わり、それが「騙し合い」のゲームを始めてしまうきっかけとなっていることも最近気づきます。商売をしているほうは、一日に何人もの客と顔を合わせているのですから、客が店に入った瞬間にその人が何を欲しているかを見破るセンスを備えていることが多々ある

でしょう。「どうせ騙される」と決め付けしないで、すこし心に余裕を持つことも、私のほうに必要かとも思うのです。

値段交渉はあまり好きではありませんが、その時々自分の心理状態を知るには、良い鏡となってくれるような気が最近します。

2003年5月

『滋賀県立琵琶湖博物館館長の川那部浩哉さんは、「サステナブル・デベロップメント：持続的開発」のほんとうの意味が、「正しい状態を保たせ、ゆっくりと展開させていくこと」にあると指摘しています。この場合の「正しい状態」とは「価値や正当性を擁護する」「失敗したり落ちこんだりしないように支持する」という意味を含んでいます。この言葉は本来、みずから持続可能なライフスタイルを体現している人達が「ゆっくりと展開させて」いて、はじめてそれが可能になるという、「開発」や「成長」の主体のあり方が問われる言葉なのです。』

(上野圭一著、「代替医療」より抜粋)

「聴く」ということは日常生活で欠くことの出来ない重要な行為ですが、それでも私達が「今日はちょっとしゃべりすぎた」ということはあっても、「今日は聴き過ぎた」と反省することは稀です。今月は、昨年9月エチオピアで実施されたプロジェクト評価に続き、FHI ウガンダの評価チームに参加。まさにプロジェクトの受益者の声に、徹底的に耳を傾ける貴重な時間を過ごす事ができ、しっかり「聴く」ことに慣れていない自分を反省しました。

首都カンパラから車で40分ほどのところにあるブンタバ村。4年前から貧しい家庭の子供達の教育支援をしているプロジェクトを訪問。一年前に日本のお客さんと共に訪れた村でした。FHIが入ったことでどんな変化が村、リーダー、そして家庭の中で起きたのか、どんなチャレンジがあるのかといったことに加え、FHIにとって改善すべき点なども質問として上げられました。もちろん、いきなり外から来た人に対して「これは良くない」といったネガティブな返答は、村の人々はしないものですが、これもこちらがどう質問するかによって徐々に打ち解け合ってくるものです。

そして、何よりも村人たちが質問されていくことで自信をつけていく様子も伺えました。とかく私

達は「この村にまだどんな問題があるのか？何が出来ないのか？」といったことを聞き出す傾向がありますが、逆に「あなた達は村の向上のために何をしていますか？どんなことが得意ですか？」といった質問から、答える内容よりも会話のプロセスで自らの可能性に視点を移すことが出来、やがて聴かれる立場の人々が元気付けられるのです。

村ではちょうど 1 年前、現金収入を得るための養鶏グループが結成され、当時は生産性の高い新種の鶏や農業専門家を連れてくるのではなく、在来種を少しずつ育てる練習を自分達で始めたところでした。鶏の数も 5、6 羽だけで卵も毎日 2、3 個程度だったのを私も覚えています。そして、今では毎日 60 個ほどの卵を生産するほど活動となり、販売利益をすこしずつ貯めているところです。これは、FHI が新しい技術などを持ち込まずとも、ゆっくりとした村人の成長を待っていたことで、少しずつ経験を積みそしてこれからも「続けていく自信」をつけていったと言えます。養鶏専門スタッフを雇い入れ、農業活動部門をプロジェクトに設置しても効果はあったかもしれません。しかし、逆に村人の生産性向上に比例して FHI への依存性も更に高めることに貢献していたかもしれません。いつまでたっても自立できない状態、FHI がいなかったら活動を続けない村組織を生み出していたかもしれません。

発展途上国における国際協力のスタイルは依然として「するモード」。結果がすぐに見えるような建設作業をする、プログラムを計画・実行する、技術を与える、専門トレーニングをする。なんでも「する」。数え上げたらきりのない村の必要の中で、果たして外部者である私達が何かを「するモード」で入る時、村人達の「参加」などはただの建前にしか過ぎません。NGO が新しい活動を始める前のお決まりの儀式であり、やがては剥がれる金のめっきのようなもの。数年後の「持続性」が問われます。しかし、人々が経験を通してしっかり自信をつけていくのを見守り、適度な助言・支援活動に留める時、そこに「待つモード」の活動スタイルが生まれ、人々の成長に合わせた協力の可能性が見えてくるのです。しっかり精錬された金が時を経る毎に輝きに深みが増していくのと同じです。

ゆっくり、しかし確実に成長する農村への支援に関わる時、私達はつい「しゃべりすぎ」そして「やり過ぎ」となります。これからは「聴き過ぎた」「待ち過ぎた」と反省できる支援スタイルが求められます。これは、明日の行動予定(すること)が詰まっていないと落ち着かない文化にある日本人にとっては至難の業。でも、「聴く」時間を意図的に増やすこと。これは日本でも今から誰もが始められる「形を変えた支援」のひとつです。

2003年6月

「鍛えるのは強くなるためだけではない…鍛えて弱くなるようにならなくてはいけない。少なくとも、鍛えて強くなることによって人間の弱さを知り、理解が示されるようにならなくてはならない。」「The School is My Church - 霊を磨く場所」赤木英哉著

エチオピア南部・ボリチャ郡の急性栄養失調児救済センターを訪れた時、極度の栄養失調ですでに意識不明状態になって担ぎ込まれた小さな子供が医師によって緊急処置がなされているところでした。それこそ、骨しか残っていないような腕、足から見ても、家族全体が極限の状態にまで追い込まれていたことを想像させます。

今年のエチオピア旱魃被害は、世界の目がイラク、中東に集中しているからか国際的なメディアでも扱われません。しかし、人口の17%、およそ1千万人にもおよぶ人々、特にその多くは子供達が飢餓に瀕しています。救済センターに運ばれ治療を受けてから回復しても、農作物の収穫がある9月頃までは家に戻っても食べるものがない為に、再び栄養失調に陥りセンターに舞い戻ってくる幼児もいるとのこと。

今月はこの新たな救済センター設置のプロジェクト立ち上げのための提案書作成に費やされました。しかし、緊急事態は日々刻々と変化、または改善していきます。結局私が書いた提案書も現地を直接視察した時には無効とも言える状態になっており、次の代替案を考えているところです。私達団体、そして私自身の能力不足を思い知らされる結果となりました。緊急に迅速に対応できる大型国際NGOとの連携、情報交換、人脈作り、対応の早い資金調達先との協力関係と、様々な課題が山積みです。

続きは次号…。